

入院している児童・生徒のための行事の充実

～オンラインを活用した芸術体験教室、文化祭～

東京都立小平特別支援学校武蔵分教室 病院訪問部研究会

I 病院訪問部の概要と研究の目的

都立小平特別支援学校武蔵分教室病院訪問部は、東京都の多摩北部地域の病院に入院している小学生から高校生までの児童・生徒のための訪問学級である。それぞれの病院に教員が出向き、基本的に一对一の授業を行っている。児童・生徒の実態が多様な上、近年は3ヶ月程度の短期的な入院の児童・生徒が多い。

さて、学校行事の目標は中学校学習指導要領において「全校又は学年の生徒で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら、(第5章特別活動)第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。」とされており、病院内の教育活動の中でも設定されている。しかし病院訪問部は前述のような状況であるため、年度のはじめにどのような児童・生徒がどの時期に何名程度在籍するか予測を立てて行事を計画することができない。また同じ病棟に在籍する児童・生徒が1名のみ、ということも多々あり、集団や連帯感への意識をもつことは非常に難しい状況である。

このような中、どのような児童・生徒がそれぞれ異なる病院にいても参加でき、普段の授業での一对一の関わりとは異なる人とのつながりを意識できる学校行事について研究を進めることとした。

II 研究の対象

学校行事の中の「文化的行事」にあたる「芸術体験教室」(1学期に実施)と、「文化祭(オンラインの部)」(2学期に実施)を対象とする。

III 研究の方法

過去に実施した行事の分析を行い、課題を整理する。改善策を立てそれぞれの行事を実施し、成果と今後の課題を明らかにする。

IV 成果

1 「芸術体験教室」

以前は「芸術鑑賞教室」という名称で行ってきた行事である。コロナ前は音楽鑑賞の行事として位置づけられ、病棟に楽器演奏者が入って生演奏をしたりしていた。しかし、コロナ禍で外部の人間が病棟に立ち入ることが厳しく制限されるようになり、生の演奏を児童・生徒の元へ届けることが難しくなった。そこでオンラインによる音楽鑑賞の行事を試みたが、

オンラインでは音のトラブルが発生しやすく、純粋に音楽を聴いて楽しむ環境を整えることは教員だけの技術と学校にある機材だけでは大変難しかった。

そこで音楽だけにこだわらず美術活動の「芸術」も考えてみてはどうかとの案が上がり、令和3年度より美術の専門家によるオンラインワークショップを取り入れた芸術鑑賞教室を開催することとなった。児童・生徒は自分たちで作品を作ることを大変楽しんでいる様子だったので、より体験的な時間を長く取れるよう令和5年度から「芸術体験教室」に行事の名称を変更して実施した。芸術体験教室を企画する際には、いくつかの課題があった。

- ①実施日直前に新しい児童・生徒が入ることがあるため、参加人数の確定が難しい。
→何人であっても実施しやすい内容にする。
- ②全学年、全教育課程の児童・生徒（小学校1年生から高校3年生）が対象である。
→どの学年、教育課程の児童・生徒でも主体的に参加できる内容にする。
- ③病棟によっては、児童・生徒のはさみ等の使用に制限がある。
→使用する道具に配慮する。

このような点を考慮しながら「芸術体験教室」を以下の要領で行った。

テーマ、内容：「ひかる形、重なる色 ～影絵作品の制作と鑑賞体験～」

オンラインで講師よりデザインと影絵の話を聞いた後、ワークショップでカラーセロファンを使った制作を体験する。

講師：Art Education Research UMUM 田中 令先生

準備物：カラーセロファン（予め丸、三角、四角にカットしたもの）、透明な台紙（OPP袋）、スティックのり、油性ペン、白布、懐中電灯、オンライン会議用機器一式

時程：45分ずつのワークショップをA病院で1回、B病院で1回、C病院で2回、計4回実施する。

大きさ、そして色も様々な丸、三角、四角のカラーセロファンを児童・生徒たちがそれぞれ思い思いに並べたり重ねたりしながら作品を仕上げていった。児童・生徒はオンラインで講師とやりとりして新しい刺激を受けながら、作品づくりのヒントを得たり、アイデアを深めることができていた。ある生徒はオンラインで講師にテーマを相談し、最終的には未来都市をイメージしながらセロファンを並べて作品を仕上げた。

また講師が手本を示す際に手元カメラを用いて画面に映すことができたので、児童・生徒はやることの見通しを持ちやすくなった。手指の動きに制限のある生徒は自分で選んだセロファンを台紙のどこに貼るか教員に細かく指示を出しながら作品を仕上げ、頭の

中にイメージをしっかりと描いている様子がわかった。出来上がった作品にライトで光を当てて白い布や壁に映すと、また新しい美しさや面白さを体験することができた。



写真1 セロファンを選んで並べている様子



写真2 魚をイメージした生徒作品

芸術体験教室を企画する段階で挙げられていた課題は以下のように解決した。

①参加人数が何人であっても実施しやすい内容

カラーセロファンなどの材料を在籍人数よりも多めに用意することで、急な児童・生徒増にも対応できるようにした。

②どの学年、教育課程の児童・生徒でも主体的に参加できる内容

ワークショップでの題材は正解も不正解もなく、どの学年の児童・生徒も自分で考えてセロファンの配置を工夫して楽しみ、達成感を得ることができた。

③使用する道具への配慮

予めセロファンをカットして用意したことで、児童・生徒が使用する道具はスティックのりだけにすることができた。

必要な改善点としては、生徒の様子の映し方が挙げられる。空間が限られたベッドサイドで、教員が手持ちの iPad でベッドで横になった姿勢で参加している生徒の様子を映したが、うまく全体像を映して講師に様子を伝えることが難しかった。iPad スタンドやアーム、または小型のウェブカメラなどの活用の検討が挙げられた。教員側は生徒に講師の様子を見せることには気を配っていたが、生徒の様子を講師にわかりやすく伝えることに考えが至っていなかったため、この点を次回への課題としたい。

2 「文化祭（オンラインの部）」

病院訪問部に在籍している児童・生徒たちは、コロナ禍前までは文化祭には通学生徒のための「本校」の文化祭に作品を出品する形で参加していた。しかしコロナ禍にオンライン授業が普及したことで、文化祭のオンライン実施が可能となり、入院中の児童・生徒がより主体的に参加できる形を模索するようになった。ここでも芸術体験教室の時と同じように、行

事を企画する際にいくつか課題があった。

①実施日直前に新しい児童・生徒が入ることがあるため、人数の確定が難しい。また児童・生徒によっては文化祭にむけた準備期間が非常に短い。

→短い準備期間でも可能な内容にする。

②別々の病院に入院する児童・生徒なので、「協力して」「力を合わせて」といった内容が難しい。

→オンラインで一体感を出せる工夫をする。

※在籍児童・生徒数が多く、様々な事情から他の病院の児童・生徒との交流が難しい C 病院は病院内で単独で文化祭を開催した為、C 病院以外の病院に入院している児童・生徒をオンライン文化祭の対象とすることにした。

令和5年度のオンラインの部には、3つの異なる病院から4名の児童・生徒が参加した。1学期から在籍していた生徒は1名で、他の3名は2学期途中からの入院であった。学年も教育課程も異なる4名が、自分のペースで準備しつつ一緒に行事を楽しめるように文化祭では「全員合奏」と「個々の学習発表」の2種類の学習発表場面を設けた。

全員合奏では、皆が知っているアニメーション映画のテーマ曲をキーボード、ベル、ドラム、ベース、ギター、ツリーチャイム、マラカス、カスタネットのパートに編成し、児童・生徒4人の実態に合わせて振り分けた。それぞれが演奏して録画したものをひとつの映像に合わせて合奏が仕上がった。映像上での合奏なので、1人が複数の楽器を担当することができた。またこの形式であれば、もし文化祭直前に児童・生徒の転入があっても、映像上ですぐに新しいパートを重ねることが可能で、病院訪問部のように児童・生徒の出入りが激しい環境に適していた。

文化祭当日は、4名の合奏の様子が映し出されると児童・生徒達はその映像を真剣に見入り、自分の楽器の音に他の楽器の音が重なる様子をよく聴いていた。時折一緒にリズムをとって体を揺らしている生徒もいた。

学習発表では、児童・生徒が関心のある自然現象や食べ物について調べたことをスライドにまとめて発表したり、日頃の学習の様子を写真と動画で発表したりと、それぞれの実態に合わせた学習発表を行った。どの児童・生徒も他の人の発表を真剣によく聞いていた。発表の中でクイズを出した生徒は、参加者からリアクションを得て嬉しそうな表情を浮かべていたり、また他の生徒は発表が終わった時にたくさんの拍手をもらい誇らしそうな笑顔を見せたりしていた。直接同じ場所に集まることはできなかったが、オンライン上でも人と人とのつながりを感じ、その嬉しさを体験することができていた。

文化祭を企画する段階で挙げられていた課題は以下のように解決した。

①短い準備期間でも可能な内容

1ヶ月以上準備期間が見込める生徒には、何度も楽器の練習の機会を設けたり、学習発表の準備をじっくり行ったりすることができたが、直前に入院する児童・生徒も見越して合奏では様々な楽器のパートを用意し、数回の練習でも参加できるようにした。また個々の学習発表も児童・生徒の実態に合わせ、発表の内容や形式を自由にしたため、行事直前に入院する児童・生徒にも対応できるようにした。(結果的には今年度は直前に入院する児童・生徒はいなかった。)

②オンラインで一体感が出せる工夫

合奏では生徒たちの音が重なり合い、皆でひとつの曲を演奏した実感をもてたようだった。直接会うことができなくても、協働してひとつの作品を作ることを体験することができた。また生徒の発表の中にあつたクイズについて他の生徒に答えを求めることで、司会の教員を介してではあつたが、児童・生徒同士のやりとりができた。

文化祭実施後の教員アンケートでは、文化祭前から児童・生徒同士の交流を促す活動を設定してもよかったという反省が挙げられた。文化祭当日に初めて会って交流するよりも、事前に顔を合わせてある程度お互いのことを知り合ってから行事に臨めば、より集団活動として活動の意義が深まったかもしれない。病気の状態や本人の気持ちなどに配慮しながら、可能であれば次年度は行事を実施する前からの交流も試みたい。

V まとめと課題

外部の講師や他の病院の児童・生徒と関わりをもつことができた芸術体験教室と文化祭の取り組みは、日頃対一の授業を受けている病院訪問部の児童・生徒にとっては普段の授業とは異なる学びのある貴重な機会となった。年度のはじめにどのような児童・生徒が在籍するか予測できない特異な状況において、工夫するポイントは

- ・児童・生徒の実態によって課題の難易度や量が調節できるものを用意すること
- ・正答も誤答もない体験的な活動を用意すること

であつた。

そして入院している児童・生徒が病院の外にいる人との交流するために、オンラインというツールは欠かせないものになった。芸術体験教室では児童・生徒によく見える環境、よく聞こえる環境には気を配ったつもりでいたが、児童・生徒の様子が相手によく見えるようにカメラ等を配置する配慮を怠ってしまった場面があつた。児童・生徒自身の様子を相手に伝わりやすくする方策を今後の課題としたい。また、児童・生徒の実態や入院の状況によっては行事当日のみの交流ではなく、行事に向けた協働学習を計画することも視野に入れておくと、より深い学びにつながると考えられる。今後もより柔軟な発想で、その時々に入院する児童・生徒にとってより良い行事をつくっていききたい。